

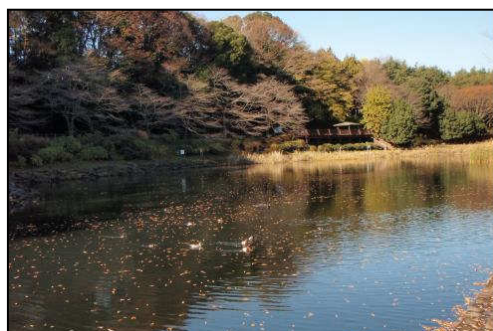
泉の森 なんでも情報館

2012年 冬号(No.8)

発行 しらかしのいえボランティア協議会
エリアマップ作成班

クローズアップエリア その8 しらかしの池周辺

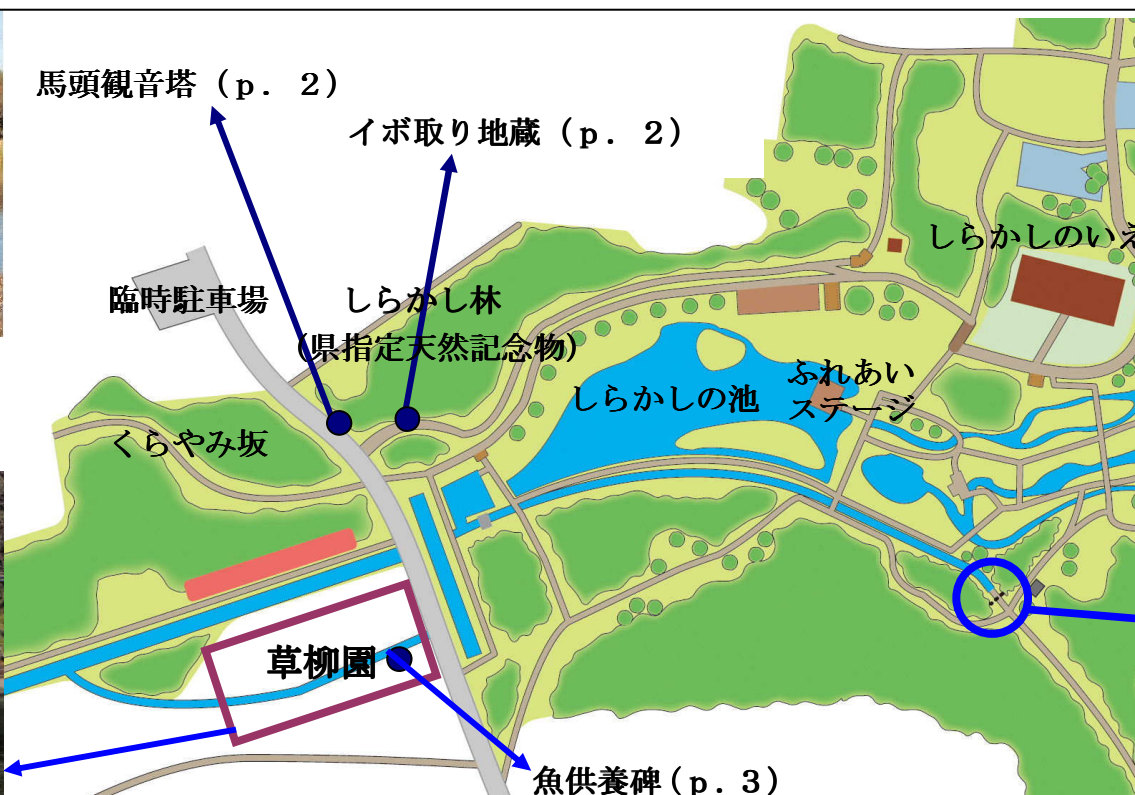
泉の森の顔、しらかしの池には大勢の人や野鳥が集まり、普段はのどかな美しい池ですが、ひとたび大雨が降ると本来の調整池に変身します。その池のおいたちや周囲の歴史、施設、水鳥の生態など興味深い話を紹介します。



シラカシ林と落ち葉舞うしらかしの池 (p. 2)



釣堀“草柳園”。入ったこと、ありますか？
どんな所か、歴史も含めて紹介します (p. 3)



馬頭観音塔 (p. 2)

イボ取り地蔵 (p. 2)

臨時駐車場

しらかし林
(県指定天然記念物)

しらかしのいえ

くらやみ坂

しらかしの池
ふれあい
ステージ

草柳園

魚供養碑 (p. 3)



しらかしの池に今年も渡りの鳥達がやってきました (p. 4)



しらかしの池の横に側溝があり、このトンネルから流れ出ています。この水はどこからくるのでしょうか？ (p. 3)

しらかしの池の生い立ち

今年も又、北の国から多くのカモがしらかしの池に渡って来ました。ヒドリガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、コガモなど。水面を悠々と泳ぐカモ、逆さまになってお尻を見せながら水草を食べるカモ、脚を踏ん張ってブレーキをかけながら降りるカモ、カモの様々な姿態が観られます。池にはカモの他にもコサギ、アオサギ、カワセミなど多くの野鳥が1年を通して集まって来ます。周囲を森に囲まれたしらかしの池は野鳥の楽園なのです。

では、この池はいつ頃できたのでしょうか。昔はどうなっていたのでしょうか。池は昭和57年、調整池として造られました。その時、西側の堤防や水門も造られています。都市化に伴い道路が舗装され山林は宅地に変わったため、大雨のときは雨水がそのまま鉄砲水のように引地川に流れ込んでくるようになったのです。そのため洪水にならないよう、一旦、調整池に水を貯め勢いを緩めたうえで下流に流すようにしました。大雨のときはしらかしの池だけでなく周囲は一面水浸しになってしまいます(下の写真)。しかし、この池の存在が下流の洪水を防止しているのです。堤防の上に植えられた桜は樹齢30年を数え、春には見事な花を咲かせます。しらかしの池は人間にも野鳥にも優しい池なのです。

昔はしらかしの池のあたりは引地川の水を利用した水田でした。水が冷たいためか米の出来があまり良くない上に、一部は胸まで漬かるような深田だったそうです。現在、池の東に鬱蒼とした林がありますが、以前はそこに米作りの農家が数軒ありました。しかし、厚木基地の米軍機が何度も墜落事故を起こしたため、昭和35年から39年にかけて国に緩衝地帯として収用され、家を撤去した後は樹木が植えられ現在の林になっています。しらかしの池は色々な事件や歴史を呑み込んで、今日もその優しい素顔を私たちに見せてくれています。(橋本 幸夫)



大雨の後。水車小屋前まで水浸し。

馬頭観音とイボ取り地蔵

しらかしの池付近の道路沿いに大小9基の馬頭観音塔が祀られています。江戸時代から明治、大正にかけて建立されたものですが、時がたって荒廃した状況を見て心を痛めた地域の人々が、昭和47年に現在地に合祀し供養塔を建てました。

個々の馬頭観音塔を見ると農耕作業中に病没した馬だけでなく「日露役徴発 馬頭観世音」、「日独戦役徴発馬匹記念塔」と刻まれた石塔があり、日露戦争や第一次大戦で上草柳村から徴発され戦地に赴いた馬がいたことが分かります。日頃から貴重な労働力として、また家族の一員のように大事にし、かわいがってきた愛馬が遠い戦地に行き、戦場を駆け、傷つき、倒れ、再び故郷に戻ることがなかったのです。愛馬の菩提を弔い供養するためにこの馬頭観音塔は建立されましたが、馬に対する村人の愛情の深さが分かります。

馬頭観音塔は道端に無言で立っていますが、水や、時には花が、今でも手向けられています。



馬頭観音塔

シラカシ林の南端で馬頭観音塔のすぐ近くに祠がありますが、そこにはお地蔵様が祀られています。このお地蔵様は300年ほど前の宝永6年(1709年)に建立されたものです。イボを直すご利益があるとされ、イボができたときにお地蔵様に積まれている石を一つ借りてきてイボをなでるとイボが取れたといひます。イボが直ると石を倍にして返しました。朝晩なでてイボが取れた人は引地川の川底にあるきれいな石を拾ってきてお礼に返したといひます。このほかに子育てにもご利益があると言われ、子供が丈夫に育つとお礼によだれ掛けを奉納したそうです。

上草柳村の村人の素朴な信仰がうかがわれますが、お地蔵様へのお礼がユニークですね。現在お地蔵様は祠の中に入っていますが、これは昭和55年に旧山谷地区の親睦会である山親会によって建てられたものです。(橋本 幸夫)

参考文献 大和市教育委員会「大和市の民間信仰」



祠の中のお地蔵様

泉の森の水ものがたり —引地川の第二の水源？—

しらかしの池の隣に側溝があり、ハツ橋デッキの奥の排水トンネルから水が流れ出ています。この水はどこから来るのでしょうか？ これを調べに大和市役所 都市施設部に行き、ご担当の方々にいろいろ教えてもらいました。

1. 普段は雨水や工場の冷却水

ここに来る水は、主に雨水や工場冷却水だそう。正確には、右の図のように、国道246号の北側の地区の側溝から“雨水幹線”に集まり、これに工場の冷却水が加わって、泉の森の排水トンネルから引地川に流れているのです。

2. 大和市の下水道

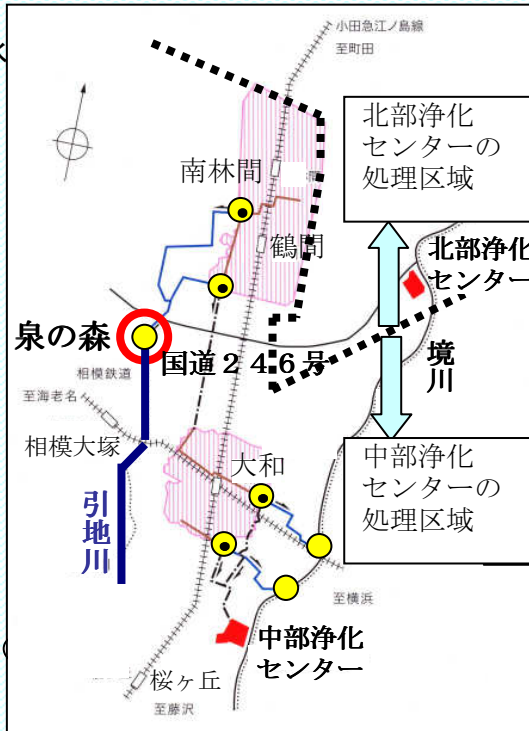
家庭の台所やトイレ・風呂からの生活排水や工場排水などの汚れた水を“汚水”と呼び、“雨水”と合わせて“下水”と呼びます。汚水は浄化センターに運ばれて汚れを取り除いた後、境川に流されています。雨水は、汚水と別に流す“分流式”の地域と、汚水と一緒に流す“合流式”の地域があり、早くから下水事業に着手した大和駅や南林間駅周辺が合流式になっています。

3. 大雨のとき

合流式の地域の雨水と汚水が合流した下水は、合流管を通して浄化センターに行きますが、大雨で処理能力を超えると“雨水吐き室”から雨水幹線に流れ、泉の森に、雨水によって希釈された汚水が流れ出る可能性があることを知っておく必要があります。大和市では、この現状を改善するため、雨水吐き室からのゴミの流出を防ぐスクリーン設置を済ませ、さらに大雨のときに未処理下水を一時的に貯める“雨水滞水池”を建設したり、浄化センターへ送るための管(遮集管)の増強等の事業を実施しているそうです。

4. 川をきれいにするために

泉の森の湧き水だけでなく、私達の町から流れていく水も引地川の水源なのです。町を綺麗にすることが引地川を綺麗にすることにつながりますね。(伊藤 健一)



凡	例
	合流区域
	雨水幹線
	遮集幹線
	合流管
	雨水吐き室
	流出箇所

草柳園の魚供養塔

しらかしの池の向こうに草柳園があります。ヘラブナ・コイ・ニジマスや金魚・チョウザメを飼っている釣堀です。入口の駐車場の近くに“魚供養塔”があり、裏側に草柳園ができた経緯が刻まれています。その内容と、草柳園の社長の二見保之さんに伺ったお話を紹介します。

1. 草柳園ができた経緯

昔、このあたり上草柳村はのどかな田園でした。しかし戦後、米軍厚木基地ができ、墜落事故（特に昭和39年の館野鉄工所墜落事故）が相次ぎ、滑走路延長にある土地は国に収用され、民家は移転しました。

昭和43年正月、養殖と料理を学んだ先代の二見保さんがここで井戸を掘り、地下60m付近の固い石砂利層付近に豊富な水脈を見つけ、水質検査を行って質も良好であることを確認しました。そこで近隣地主さんの協力で土地を確保し、同年8月に工事を始めて翌年6月に完成したのが、この釣堀なのです。もともと深い泥田の地を手掘りで堀にしたとのこと、さぞやの労苦が想像されますが、先祖代々の上草柳の地名が消え去ることがないようにと草柳園と名付け、ユートピアを願う思いが碑文に記されています。

2. 現在

園内を掘が通っていて引地川に繋がっています。これがもともとの引地川流路とのことで、今は釣堀からの水が流れています。草柳園の地下水は、災害時指定水源にもなっており、引地川の第三の水源にもなっているのです。

園内には食堂もあり、釣りをしなくても園内散策・食堂利用はOKとのこと。私達も食事をしました。各種メニューがありますが、さすがに養殖魚の料理が多く、草柳丼(900円)を選んだらニジマスの唐揚げと野菜天婦羅が乗った天丼：おいしかったです！泉の森の鳥さんたちもときどき釣堀の方に食事？に来るそうです。(伊藤 健一) (参考：草柳園は元旦と木曜日が休園。食堂は11時から)



魚供養塔



釣堀に注ぐ地下水



草柳丼を堪能

しらかしの池の水鳥たち

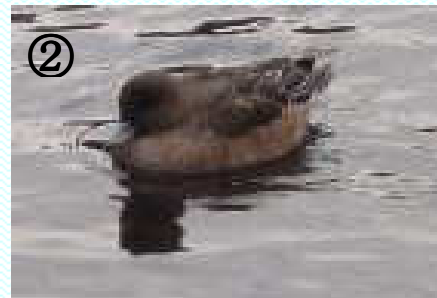
季節限定の越冬ガモと一年中見られる2種類をご紹介します。

冬の口笛 — ヒドリガモ(カモ科) —

この季節、しらかしの池近くを歩いていると、時々「ピューン」という甲高い口笛のような声が聞こえてきます。声の主はヒドリガモの雄。雌はこの声は出しません。朝もやが立ち上る池から、この声が聞こえて来ると、なぜか唱歌「冬景色」が思い出されます。「ただ水鳥の声はして」の水鳥は、ヒドリガモだったのかな？

ある時、十数羽のヒドリガモが群れているところから「ワンワン」と犬のような声が聞こえたことがあります。これもヒドリガモの声と思われそうですが、雄雌どちらが鳴いていたのか、両方が鳴いていたのか判りませんでした。

雄の姿は、黄色っぽいおでこに赤い顔(写真①)、雌は全体が赤褐色で雄よりも地味です(写真②)。(小林 みどり)



越冬ガモ・最近の状況

しらかしの池で冬を過ごすカモのうち、最近いちばん個体数が多いのは、上でご紹介したヒドリガモ。以前はホシハジロが個体数ナンバーワンでしたが、2009年、ヒドリガモにトップの座を奪われました(本紙第1号に詳しく書きました)。キンクロハジロは昔は少なかったのですが、増えてきました。他にマガモ、コガモ、オナガガモが毎年渡ってきます。ヨシガモ、アメリカヒドリ、トモエガモなどがやってきた年もあります。(小林 みどり)

いま、追い出されています — カルガモ(カモ科) —

一年中姿が見られるカモです。引地川で繁殖をしているので、子連れのカルガモに会ったことのある人も多いと思います。夏初めに他のカモたちが北に帰ってしまうと、この池を住処にして水車の近くで巣を作って、子育てをしようと準備をしたこともありました。ところが、ここにはアオダイショウという天敵が住んでいたもので、失敗に終わってしまいました。そして、秋になり、ヒドリガモなど北からカモたちがやって来ると、広い水面のある「しらかしの池」から上流の小さな池などに追い出されてしまいます。北から長い飛行をしてきたカモたちの方が力が強いのでしょうか？ムクの実やドングリを食べに陸に上がって、落ち葉の下を何か探しているところを見る事もあります。(藤井 和子)

潜りの達人 — カイツブリ(カイツブリ科) —

しらかしの池で一番小さい水鳥(下の写真)。「カイツブリ、なぜこの名前が付いたの？」と聞かれ、ちょっと調べてみました。<カイツ・ツブリツ>、漢字では<掻きつ・潜りつ>です。泳ぎをよく見ると、大きな足で水を掻き、潜るのが上手ということからきているようです。このカイツブリ、しらかしの池とその上流の八つ橋デッキの間を水の流れに沿ってトンネルを行き来していました。しらかしの池の北側、トンネル近くで、スッと潜ったカイツブリ、なかなか出て来ません。すると、上流の池で「ケレケレケレ」と甲高い声で鳴き声が、「こっちだよ・・・」と言っているようです。また、その先のスイレンの間に潜り込み、ザリガニや小魚を追いかけているのを、八つ橋デッキの上から見る事もあります。(藤井 和子)



第9号は、2013年3月発行の予定です。どうぞ、お楽しみに！